

美術科教員の職業適応プロセス

ーライフヒストリー・インタビューにもとづく質的検討ー

Professional Adaptation Process of Art Teachers
ーQualitative Study Based on the Life History Interviewー

荷 方 邦 夫
NIKATA Kunio

1. 問題と目的

1.1 はじめに

教員の指導力向上が求められる中、教員採用後の教師教育は関心が高い。その一つとして、教員としての成長過程を解明し、どのような支援や介入が教員の適応に寄与するかを明らかにすることは重要と思われる。特に従来のアンケート形式の調査では解明できなかった長期的な職業適応プロセスを、質的研究によって検討し、長期的視点からの教員養成を効率的かつ有効に行うための基礎的知見を提供することは意義深い。しかしながら当該の目的を検討した研究は例が少ない。

本研究はこの問題を解明するため、中学校、高等学校の美術科教員を対象として、5～20年程度の長期的な職業適応プロセスについてインタビュー調査を行った。調査では特に美術系大学を出身とする教員を対象とした。教員になることへの方向づけが当初から強くなく、また芸術家として独特のマインドをもつと考えられる対象者らについて、教員としての適応プロセス、学校教育に対する姿勢の変化などを幅広く検討する。

1.2 教員の職業適応

現在の教育現場が抱える問題として、若年層の教員が高いストレスにさらされていることが指摘されて久しい。平成22年に実施された文部科学省の学校教員統計調査¹では、20代の本務教員の離職率は

全体で2.5%と、他の世代に比較して圧倒的に高い水準である。

このことは、若年層の離職率が高いという解釈も可能であるが、高年齢層では既に離職のリスクが高い教員が離職後であるため比較的若年層が高いという解釈も成立する。しかしながら以前の学校教員統計調査との比較から、離職率が増加しているという統計もあり、総じて若年層の教員の定着率が低くなりつつあるとみることができよう。

これらの問題は、学校教員という職業に対する個人の適応が低下していることによると見ることができる。職業適応は、現代の教育現場におけるキャリア発達の大きな課題であり、従来その研究も数多くなされている。

個人がある職業に就職した後に、その職務に対して適応しているか、あるいは満足を感じるかについての理論として、個人・環境適合理論が知られている(Swanson&Fouad, 1999²; 渡辺・ハー, 2001³など)。個人・環境適合理論は、個人の職業における能力や適性、希望などの諸資源と職業を構成する職務などの性質を含む個人と仕事環境が一致していれば、職務に対する適応や満足が得られるとする理論である。高木ら(2008)⁴は、個人・環境適合理論をもとに教師のキャリアに対する適応力と職務に対する葛藤が、教師の職業ストレスに関与していることを指摘している。その中で、教員が感じる職務葛藤として、職場の環境、授業や学級経営、個別の生徒指導に大きく分けられるとしている。また、キャリア適応力

についてはスーパーらの研究 (Super, et al., 1988)⁵ をもとに、キャリア発達のプロセスの中で、職業に対する愛着。希望。信念。責任感などが醸成され、それらが適応的に働くと考えている。

松井・柴田 (2008)⁶ は、伊田 (2005)⁷ の教職志望動機をもとに、教師の進路決定プロセス及び職業的アイデンティティとの関連を検討した。伊田や松井・柴田らは、教職を志望する動機には教師に対するイメージの要因と個人的体験の要因の2つがあるとしており、教師に対するイメージとして安定志向 (経済的・社会的安定) と自己志向 (専門的能力を活かすことができ。自分のやりたいことができる)、個人的体験として教育への志向性、学校への愛着、恩師へのあこがれ、対人的志向性の高さを指摘している。また教師の職業的アイデンティティを形成する要因として、教師としての自負、社会貢献、生き方への自信、教育観の確立があると指摘している。これらの動機やアイデンティティの高さは、教師としての職業適応、すなわち教師としての仕事のやりがいや生きがい。仕事への満足などに繋がっていると考えられる。

若年層の離職率の高さを考えるとき、これらの要因に配慮したキャリア支援、個人の適応の課題に対する取り組みの支援が重要であると考えられる。

1.3 美術科教員の適応から見る職業適応

本研究では、美術科教員。特に芸術系大学を卒業し、学校教員に就職した個人の適応について焦点をあてた検討を行う。前掲の松井・柴田⁸ (2008) は教師の進路決定プロセスについて、最初から教員を志望していた早期決定型、なりたいたいと思っていた職業があったが教職に転換した途中変更型、なりゆきで試験を受けたなりゆき型など、その他直前決定型・転職型などを挙げている。音楽も含め、芸術系大学に進学した学生はこれとは別に、実際に芸術家として生活を行うことが困難であるため、生活のために教員となり、同時に制作や芸術活動の継続を期待する「生活の糧型」と言うべき志望を指摘することができよう。特に、教員への進路が明示的に示される

教育学部の美術教育コースではなく、芸術家として方向性を示される芸術系大学においては、この傾向が特に強い。

松井らの指摘によれば、途中変更型やなりゆき型は教員としての動機づけが十分ではないため、適応の程度が低いとされている。ならば美術科教員の職業適応の状態は必ずしも良好ではないと予測されるが、教科種による適応の違いについては具体的な根拠が示されていない。

逆に、芸術系大学出身の美術科教員がどのように職業適応を果たしているか検討することにより、有効な適応への支援の可能性や、キャリア支援における方法の改善を見出すことができよう。本来、適応に必要なとされる条件が十分ではないタイプの教員も含め、教員としてのキャリアパスを重ねる中で、適応的な行動を行い、適応的な姿勢や考え方を獲得することにより十分な職業適応を果たしているならば、彼らが経た適応のプロセスを見ることによって、さまざまなタイプの教員にとって適応的な職業適応のあり方を検討することができよう。

1.4 ライフストーリー・インタビューによる 適応プロセスの調査

そこで、本研究ではライフストーリー・インタビューとよばれる質的研究の方法を用いた適応プロセスの探索的研究を実施する。ライフストーリー・インタビューとは、研究対象者の自らのライフストーリーについての言及から、対象者の内的世界の情報を収集する研究手法である。

ライフストーリー・インタビューはいわゆるインタビュー (面接) 調査とは若干異なる側面がある。多くの場合インタビュー調査は、用意された調査内容を聞き取る「構造化された面接」である。ただしインタビューされた調査参加者 (調査対象者) はしばしば、用意された内容を越えた語りをすることが多い。それは参加者が構築する世界をそのままに知ることができる貴重な情報であるため尊重される。こうしてある一定の構造化は保ちながら、自由な語りがある程度許すという「半構造化面接」という形

態をとる。

このとき、参加者が質問に答えるという形式にとられず、自らのライフストーリーを語るという行為は、主観的であるとはいえ豊かな内容になることが多いとされる。徳田 (2004)⁹はライフストーリー・インタビューについて、語り手と聞き手の関係性を重視し、参加者の経験の意味づけに焦点をあてることで、生成された語りの明確化や拡張が達成されることを指摘している。

半構造化面接といえども、求められている情報はあくまで調査対象者の持つ情報であるため、調査者はできるかぎり聞くことに専念するということが調査の重要な点である。しかしながらこのような調査環境は人工的で、期待するような活発な語りを生み出しにくいことも少なくない。

本研究の調査者と調査対象者は、いずれも「教員」という立場を持つ点で共通している。それぞれに教育に対する理念や技術を持ち、自らが働く現場・環境がどのようなものであるかといった理解も持ち合わせている。このような共通の基盤をもつことで、調査は必要な視点により深く到達する可能性をもつことになると思われる。

エスノメソドロジーのように、調査者が調査対象者のフィールドに参加する場合、このような相互作用を含む語りの収集が中心となることは多い。半構造化面接を目標とした本研究の調査ではあるが、相互が教育の関係者という共通する基盤を共有しているため、インタビューに独特の性質が含まれていることは指摘しておくべきであると思われる¹⁰。同時にこのことにより、より豊かな情報が創発的に得られる可能性も期待される。

2. 研究

2.1 方法

【調査参加者】11名の美術科・図工専科教員が調査に参加した。それぞれのプロフィールをTable 1に示す。11名の教員は、10名が美術系の専門学部・大学院を卒業している。また1名が、教育学部の美術

Table 1 調査参加者のプロフィール

所属学校	年齢	性別	出身大学
中学校教諭	20代	女性	美術系学部（彫刻）
小学校教諭	20代	女性	美術系学部・大学院（絵画）
高校教諭	30代	男性	美術系学部（絵画）
中学校教諭	40代	男性	美術系学部・大学院（絵画）
中学校教諭（新卒）	20代	女性	美術系学部（工芸）
中学校教諭（新卒）	20代	男性	美術系学部（彫刻）
中学校教諭（新卒）	20代	女性	美術系学部（芸術学）
中学校教諭	20代	女性	美術系学部
高校教諭	20代	女性	美術系学部（彫刻）
高校教諭	20代	女性	美術系学部（絵画）
中学校・高校教諭	40代	男性	教育学部・大学院（工芸）

専修及び大学院を卒業している。本研究では、美術系大学の出身者との違いについて質問を行うため、1名についてのみ教育学部出身の教員にインタビューを行った¹¹。

【調査方法】調査はライフストーリー・インタビューの手法を用いた半構造化面接を行い、調査者が参加者に対して用意した質問項目に自由に回答する形で行われた。

【質問項目】質問項目は主として（1）教職を志望した動機やエピソード（2）美術家教員としての現在の仕事内容、やりがい、ポリシーである（Table 2）。また、参考となるエピソードとして大学時代の学生生活、美術系学部から教員になったことについての所感などを聴取している。ほとんどの参加者に対して、これらの質問が行われたが、参加者がこちらの質問をまたずに内容に言及した場合、質問自体は行わなかった。また関連の質問については調査者によって必要、あるいは回答が期待できる場合に限り質問を行った。

2.2 結果

それぞれの質問項目について、各教員の回答の中で共通しているものを中心に分析を行った。

Table.2 インタビューの質問内容

教員を志望したことについて

・現在、教職について何年目ですか？

・なぜ、教員になろうと思ったか。その動機を教えてください。

中学や高校の美術教育や美術の先生から影響を受けましたか？

ご家族などに教員をなさっている人がいましたか、その方に影響を受けましたか？

・教員採用試験受験について。勉強や試験のエピソードなど、覚えていることを教えてください。

大学時代について

・美大に進学しようと思った理由などを教えてください。

・専攻は何で、どういう制作をしていましたか？

・制作や勉強で、楽しかったこと、思い出に残っていることについて教えてください。

・制作などで賞をとったり、社会的な発表の機会をもったことがありますか？

またそれは、具体的にはどういうものでしたか？

・作家や、企業なども含め、将来の生き方について、どのくらい考えていましたか？

・あなたにとって大学時代は、どのような時期だったと思いますか？

制作や勉強以外で、どんなことをしていましたか？

先生になってこれまでの適応について

・先生になって、仕事や学校というものに慣れるまで時間はかかりましたか。

もしなかったとしたらそれはどういう点でしたか。

・それは、これまで芸術中心に力を注いでいたり、そういう大学出身であることと関係がありますか？

現在の仕事について

・美術を教えることについて、先生のモットーや基本的な考えなどを教えてください。

美術を教えるということの面白さや難しさをどのように考えていらっしゃいますか？

・教員をやっているやり甲斐や実感といったものを、どこで感じますか？

児童・生徒は、先生にとってどういう存在ですか？

・お忙しいと思いますが、どのような仕事が大変ですか？

現在はどのくらい授業をお持ちですか？

・教員という仕事と（何らかの）芸術活動のバランスは、どのようにお考えですか？

ご自分と美術との現在の関わりは、どのようなものだと考えていらっしゃいますか？

（関連が必要があれば）芸術系大学出身について

・教育系大学出身の美術教員と、美大出身の美術教員との間で、異なると思われる点は一体どのようなものですか？

・美大。あるいは（理学部や工学部のように）専門学部出身で、良かったと思うことや不利だと思うことは何でしょうか？

(1) 教職を志望した動機やエピソード

最も言及された動機は、美術をやることが好きだったこと。また身の回りに強い影響を与える美術の教員がいたことである。特に教員になることによって、何らかの形で制作活動が続けられるという期待についても同時に言及された。これは先に指摘したような「生活の糧型」の志望理由が明らかに存在することを示している。

また、学生の中に、保育場面や教育場面で指導をする経験をしたことや、他者の前で振る舞う経験をしたことなども言及があった。

大学時代のエピソードなどから、どの程度教員になることを意識していたかについては、比較的早い時期から教員になることを意識していた者もいる

が、やはりかなりの参加者が、教員ではなく制作や美術関係の他の職種などを当初希望していた。その中で、教育実習など教職に関する直接的な経験の中で、次第に教職に携わることへの興味・関心が増えていた。この意味で、美術系大学出身の学生は、必ずしも早期決定型のキャリア形成を行うとは限らず、自らの美術に関する活動や評価の中で、次第に教員としてのキャリア形成を進めていくものと思われる。

(2) ライフストーリーのポジティブ、ネガティブイベントに関する分析。

それぞれのライフストーリーの中で、各教員が言及したイベントについて、それがポジティブなイベ

美術	
<p>教育活動と自己の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが行ってきた研究が現場に活かされている ・どうやっていいか分からなかった総合学習の時間を、自分たちの趣味を絡めていく事で楽しく行えた ・授業準備は大変だが、楽しさややりがいを感じる ・生徒達が楽しくやるために、自分がまず楽しんだ結果、とても楽しかった <p>美術と自己</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の得意分野を生かせる ・地域の中に美術を絡めた活動ができること、それによって学校を変えることが出来る事が色々あり、学校の中での自分の活かし方を発見できたことで、教師と作家は表裏一体という実感を得た 	<p>美術の授業と生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒から色々なアイデアが出てくるのがおもしろい ・生徒が美術の面白さを感じていることが見て分かる時 ・口で言ったことではなくやってみたことや知らず知らずに描いたものが意外と面白い作品になる ・生徒が自分にはない発想をするのがおもしろい ・物がゼロから出来上がっていく喜びを味わわせたい ・生徒の他の側面を発見できることがおもしろい ・生徒がのめり込んで集中しているときはやりがいを感じる ・生徒が美術工芸という自分との対話を通して、社会的な自己を深めていってくれる所が見えてくるとうれしい ・美術が好きとか楽しいという評価を受ける事は嬉しい ・こちらが与えた課題をこなせるかどうかより、生徒がもっている別の側面を引き出すことに意味がある ・教師の思いを語ることで、考え方を一つ提示することができる ・「わかった！」といって描きはじめる生徒がいると嬉しい
自己	生徒
<p>担任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任を持つと生徒との関係が深まっていくのが楽しい ・担任が楽しい ・自分のクラスを持つと責任感が沸く ・担任を持つと教師である実感が沸く <p>学年主任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年主任をやることで、学校行事などのプランニングを通して美術を学校に反映させていける ・学年主任がおもしろい ・長いスパンで物事を計画できることが楽しい <p>自己の体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒から「先生」と呼ばれることで教師だという実感が沸く ・アドバイスをする時など教師だという実感する ・生徒が影響を受けてくれる ・子どもの思い出に残った時が嬉しい ・自分自身がやりたいことや伝えたいことを構築することが出来る仕事に当たった時が楽しい ・学内展示の評判がよかった ・先生として生徒から尊敬されることが嬉しい 	<p>生徒の成長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の成長の過程を見るのが面白い ・成長の手ごたえが形になって見えたときに嬉しい ・生徒が良い大人になったと思う瞬間 ・人間の心の複雑さ、どのような積み重ねで大人になってゆくかについて考えることができ、勉強になる <p>生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒がかわいい ・生徒たちの為なら倒れても構わないと思う ・生徒と喋るのが楽しい ・生徒と一緒になにかするのが楽しい ・生徒とうまくコミュニケーションを取れた時 ・生徒との関係が深まっていく事が嬉しい ・子どもが色々な事を考えていることが面白い ・生徒の心の中の本当の事を知ることが面白い ・お手紙をもらった時、あの時楽しかったと書いてもらえる事が嬉しい ・生徒に感謝されることが嬉しい ・予想を超えた動きをする生徒がいるとおもしろい
一般	

Figure 1. 調査で抽出されたポジティブ・イベント

ントであるか、ないしはネガティブなイベントであるかという観点からそれぞれ分類を行い、抽出と整理を行った。

抽出にあたっては、まず調査に携わっていない分析者によってイベントに対するポジティブ・ネガティブの評定が行われ、これを調査に携わった分析者によって確認が行われた。ポジティブ・ネガティブに関する評定に不一致は見られなかった。その後、調査に携わった分析者によってカテゴリーに分けられた。

分析によってカテゴリーに分けられた結果を図示する（ポジティブイベント：Figure 1；ネガティブイベント：Figure 2）。それぞれの分類されたイベントについては、美術に関連するイベントと美術に直接関連しない一般的なイベントに関わる軸（第1軸）、生徒に関連するイベントと生徒にかかわらない学校の業務や教育全体、あるいは教員自身に関わる軸（第2軸）を考えることによって、よりイベントのカテゴリーが構造的に表現できると思われたため、これに従って分類を行うことにした。

ポジティブイベントについて、最も多かったのは生徒に関わることによって生まれるポジティブな経験である。生徒そのものと関わること、関わりによってさまざまな体験ができることについては、調査対象者すべてが何らかのポジティブな経験を行っていることが示された。また、同様に生徒の成長を見ることができるといった内容の言及も見られた。また、美術教育の場面において、生徒との関わりの中から発生するイベントについても多くの言及が見られた。生徒が美術の授業の中で様々な発見を行い、意欲や喜びを持って授業をうけること。生徒の創作の中に多くのアイデアや独創的な発想を見出すこと。あるいは、教師の指導について良い反応が返されることなど、教員の美術観に関わる点についてもポジティブな経験が多いことが示された。

また美術を専門とする中で、生徒や他者を「見る」こと、対象から多くの情報を獲得することについて。多くの参加者が自己の能力を高く評価していることが報告から見出された。

また、教員としての自己の生活や仕事、美術との関わりなどについてもポジティブな経験が言及された。美術に関連する事項についてはこれまで長い間関係を持ち続けてきた美術に関わる仕事が出来ること、教員として生きる上で重要であると考えられている。

また、教員としての自己の成長、教育活動の様々な場面における経験も大きく寄与している。美術科の教員が学級担任を任されることは、他の教科と比較してやや少ない傾向にあるが、担任を経験することによって教員としての成長を実感したことなども言及された。またキャリアが進むにつれ、学年主任などの職務を体験することによって、美術に限らない教員としての経験の広がりについても言及が見られた。

ネガティブイベントについても、概ね同様のカテゴリーで検討が可能であった。生徒に関するネガティブイベントは、生徒との関係、およびコミュニケーションに関するものがほとんどであった。また、美術の授業に関しても多くの問題が指摘された。特に、美術の授業時間が削減されたことにより、充実した授業ができなくなったこと。生徒の興味・関心・意欲を引き出すことが困難になり、十分な指導を行うための余裕が著しく減少していることは多くの教員が言及した。また生徒の質的变化、特に感性や観察力、じっくりと取り組ませることなどについて従前と異なるタイプの生徒が増えたという印象を指摘する教員も多かった。

自己に関わるネガティブイベントとしては、やはり教育現場の多忙や業務の増加に関する指摘が多くなされた。授業や校務のタスクの過大さの他、特別支援など教科外の担当を任されるケースでは、経験や知識の少なさがストレスになるとの報告が見られた。またこの結果として、自身が制作を行ったり、美術についてゆっくり考えたりする時間がなく、教員として、あるいは美術に携わる者としての危機感を感じるという指摘も多くなされた。

その他、芸術表現としての生徒の活動をどのように評価するか、その考え方や方法についても多くの課

自己	美術
<p>(美術と自身の生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作品を段々作れなくなっていく ・ 全く自分の制作時間が取れない ・ 自身の制作と仕事を半々でこなしたいが、仕事の比率がどうしても高くなってしまう ・ 制作せずにいる環境に慣れてしまうことが怖い ・ じっくり考える時間がない ・ 専門を教えることが大変で、自分が美術を好きかどうか疑問が生じた ・ 仕事の他に好きなことがないと、仕事に潰されてしまうと感じる ・ 何かの出来事に囚われてしまうと、切り替えができずに日常生活もすべて仕事に持って行かれる <p>評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価を与えることが難しい ・ 細かい評価の積み重ね以外に、自分で評価しきれないことが困る ・ 美術教育の目標自体は、感性・情操、愛好する心情など言葉で示されるが、言葉で書かれていてもどういうものなのかなかなか理解しにくい。 	<p>(美術の授業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 美術の時間数が少ない ・ 基礎的な技術を全員に確認できていないことが問題 ・ 自由さが失われてゆく ・ 簡略化されてゆく ・ 生徒が高い目標設定をして、到達できなかった場合すぐ放り出してしまふ ・ 生徒の中で美術のウェートが低い ・ 良くも悪くも息抜き ・ 作品を作ることに意味があるのに、飾れるか飾れないかで見てしまふ ・ 授業を一回で完結させるための徹底的な準備が大変 ・ 美術は本物を見せるべきだが、複製を見せて分かった気になってしまっている ・ 最近の子供は観察力や良い人間や良い作品との出会いが少なく、イメージでものを描けと言っても描けない ・ 感性が未発達な子供たちの指導に手がかかる ・ 美大出身の人はアカデミックなデッサンをそのまま子供に教えがち ・ どう生徒たちが面白く見れるのか、生徒たちが興味を持ってその授業を受けることができるのか、あとは知識を得ることができるのかという所を悩んでいる
一般	生徒
<p>(指導・校務全般)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援の授業が難しい ・ 教師側、学校側に余裕がないせいで、子供が自由にしづらい ・ 担任持ったらもったで空回りをしてしまう ・ 担任を持たないと分からないことが多い ・ 感覚で身についているものを言葉にするのが難しい ・ 説明をすぐに理解できない子供に理解させるためにどのように伝えればいいのか悩む ・ 指導案が書けない ・ 先生方に提出する学校研究が大変 ・ 自分に出来ない事を要求してしまう ・ 自分自身の知識不足・勉強不足を感じる ・ マニュアルを示さないと動けない子供が増えている ・ 授業見学の表の作成や授業レポートの作成が大変 ・ 主要教科副教科で見られると美術はいらんといわれがち ・ 美大生は論文を書いたことが無いことが不利 <p>(教員相互の関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員同士の情報交換が不十分で生徒に不信感を持たれた。 ・ 職員同士の都合により、複数のクラスを掛け持ちした。 ・ 教員の入れ替わりが激しく、前の先生が良かった、今の先生が良いとか言われる ・ 先生同士の人間関係が見えてきた ・ ミスをして他の先生に迷惑をかけてしまった ・ どうしてもたくさんのごみが出てしまい、どの程度職場で受け入れられるのかが難しい 	<p>(生徒・クラス)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が反発する ・ 子供の目線に立って考えることが欠けていると感じる ・ 学生時代に制作にのめり込んでいた人は、生徒との距離がつかみづらい ・ 甘えてくる相手にどう対応していいか悩んだ ・ 生徒に抵抗感を持たれてしまった場合、接しづらさを感じる ・ 生徒のイメージが読めなくて困った ・ クラスが荒れていた ・ 女の子に嫌われるとクラス全体にそっぽを向かれる ・ 生徒が授業に参加せず、自分の興味のあることを行っでしまい、そのまま改善しない ・ どこまできつく叱っていいのかわからない ・ 本人に納得がいかなくなったりする場合に、効果的な声掛けのつもりでいった言葉が間違っていたりする ・ 全力で来る相手に答えられないと反抗期になる ・ 生徒の対応には慣れもあるが、真面目な人ほど悩む

Figure 2. 調査で抽出されたネガティブ・イベント

題を感じていること。教員相互のコミュニケーションに関する問題も比較的多くの言及が見られた。

今回のインタビューでは、比較的若い世代の教員を中心にインタビューを行った。このことから、生徒であれ、教員同士であれ、対人関係やコミュニケーションが関係するネガティブイベントの指摘が多く見られた。これに対して、比較的長いキャリアをもつ教員は、美術教育に関する課題や生徒の質的变化に関する課題の割合が増加していると思われた。多忙や業務の負担、あるいは評価の問題については世代に関わらず多くの教員が指摘する問題とであることが示されている。

(3) その他

参加者の中には、一般的な事務能力については他の教員より苦手だと報告するものと、同等にできると報告するものの2パターンがあった。

また、他の教科と異なる点として、ほとんどの教員が自分の学校の中で唯一の美術科の教員であることで、周囲に専門的な相談をする教員がいないことや、情報の交換が難しいことへの言及が見られた。

3. 全体的考察

本研究は学校教員の職業適応についての諸問題を検討するため、中学校・高等学校の美術科教員を対象として、5～20年程度の長期的な職業適応プロセスについて調査を行った。教員になることへの方向づけが当初から強くなく、また芸術家として独特のマインドをもつと考えられる対象者らが、どのような適応プロセスをたどり、また学校教育に対するどのような姿勢や見解を持っているかについて分析を行った。以下に、全体的な議論として、本研究で得られた内容をまとめ、重要な論点を整理する。また、研究上の留意点や限界について述べることにする。

3.1 美術科教員の職業適応

考察として、将来芸術活動を行うことを目的として大学に進学した参加者らは、その初期の時点では

教職への志望動機は決して高くない。また生活の選択肢が乏しい中で進路選択を行う傾向にあることが指摘できる。その際ポジティブな印象形成に寄与する教師の存在は、職業選択に強い影響を与えられる。

その中で、教員としての職業適応については、芸術という表現の現場に身を置くことから生じるポジティブな経験に大きく影響されることが示された。児童や生徒の表現活動を一人の美術関係者として関わり、表現されたものの良さや喜びを見出して成長を実感し、そこに意義を見出すことによって達成される。単に教科としてではなく、常に美術という世界に身をおいているという意識は、特に美術系大学出身者として、教員であると同時に美術に携わっているという強い意識の現れが受け取れる。

その他多忙や過大な業務によって生活や仕事が圧迫され、ストレスとして現れていることが示された。教員の職務ストレスについて、文部科学省(2013)¹²はその原因として、生徒指導、事務的な仕事、学習指導、業務の質、保護者への対応、教員間のコミュニケーションなどを指摘している。本研究におけるネガティブイベントの分析でもこの傾向は明らかに現れている。先の高木らが指摘した職場の環境、授業や学級経営、個別の生徒指導が職務葛藤の大きな要因となるという指摘について、美術の教員も同様の内容の指摘が行われた。また松井・柴田(2008)らが指摘した職業的アイデンティティに関わる内容についても、およそそれに沿った内容が、ポジティブ・ネガティブな意識として見られたことは、これらが学校教員について共通の特性であることを示唆している。

特筆すべきは、ネガティブな意識として、美術教育が現在の段階で十分に行われていないという認識がされていること、多忙化によってそもそも美術に関わる機会が制限されていることに着目している程度が大きいことである。これは先の議論にもあるように、美術系大学出身の教員の職務上のストレスが、美術の活動そのものを十分に満たせないことによって生じるということを明らかに示している。

そうであるならば、美術を専攻する教員の職業適応は、かなりの割合で自ら美術に関わることができる時間や機会を潤沢に支援することによって、その適応を改善することができるといえるだろう。

また、若手の教員については、生徒や職場の同僚などとのコミュニケーションにネガティブな経験を感じているケースが多く見られた。教員として成長する中で、生徒とうまく関係を作ること、あるいは学校で接するあらゆるコミュニケーションのスキルが上手く行くことは、ある程度時間を要する課題である。しかし、これについてもより積極的な介入がなされることによって、相当のストレスが軽減されるのではないと思われる。近年の学校現場の状況の中で、若手の教員に対する社会的な支援がより密に行われ、適応的な環境を構築することも重要な観点であるといえよう。

3.2 研究上の課題について

本研究では、美術系教員が自己のキャリア形成について、どのような認識を持っているかについてライフストーリー・インタビューの手法を用いた調査を実施した。ライフストーリー・インタビューは、個人の経験をストーリーとしての「語り」として構成する質的研究の方法である。

ストーリーとして自らの経験をとらえることは、いくつかの意味でメリットがある。そのメリットは、出来事の物語性（ナラティブ）として説明できる。ナラティブの概念は、ガーゲン（2004）¹³らが提唱する概念で、質的研究の手法、その中でも特に社会構成主義とよばれる研究でしばしば用いられる。特徴として認識の対象を中心とした方法論から、認識の主体を中心とした方法論への転回を含んでいる。社会構成主義によれば、個人の認識は個人が構成する物語（ナラティブ）がもつ視点、意味によって解釈される。また、その解釈は語り手の構築する文脈や文化的制約によって規定される。

その中で、調査者と調査対象者の間では、教員としての文脈の理解、意味の形成にもとづいて対象者の世界が構築される。このような「同僚同士の会話」

に近いインタビューの形式が発生した点が随所に見られている。

今回の分析では、得られた情報の普遍性だけでなく、同じ教員としての文化に立脚した意味の構築という視点から、教員の職業適応に関する内的な構造化を行った。一般的な客観性という点では議論があるものの、このような研究のアプローチによってさらに調査データの活用を促すことについては、今後もさまざまな議論を通しながら進めていきたいと考える。

註

- 1 文部科学省 平成22年学校教員統計調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1319073.htm
- 2 Swanson. J.L., & Fouad, N.A. 1999 Applying theories of person-environment fit to the transition from school to work. *Career Development Quarterly*, 47, 337-347.
- 3 渡辺三枝子・E.L.ハー（Harr, E.L.）2001 キャリアカウンセリング入門 ナカニシヤ出版
- 4 高木亮・測上克義・田中宏二 2008 教師の職務葛藤とキャリア適応力が教師のストレス反応に与える影響の検討—年代ごとの影響の比較を中心に—, 教育心理学研究, 56, 230-242.
- 5 Super, D.E., Thompson. A.S., & Linderman. R.H. 1988 *Adult Career Concerns Inventory: Manual for research and exploratory use in counseling*. Palo Alto, CA: Consultant Psychologists Press.
- 6 松井健二・柴田雅子 2008 教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関連 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 7, 141-159.
- 7 伊田勝憲. 2005. 就職志望動機測定尺度作成の試み—教師イメージ, 個人的経験, 理想とする教師像に着目して—, 名古屋芸術大学研究紀要. 26. 15-25.
- 8 前掲6
- 9 徳田治子 2004 ライフストーリー・インタビュー—無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ（編）質的心理学創造的に活用するコツ, 新曜社, 148-154.
- 10 相互作用的な会話が多くなったとはいえ、もちろん調査自体はいわゆる半構造化面接のスタイルに配慮されたものであり。調査対象者の発話を促すことに最大限の注意が払われている。
- 11 調査に参加した教育学部出身教員について、現職の学校教員ではなく、現在は大学で教職課程に所属する大学教員で

ある。また、単なる美術教員ではなく、作家として創作活動も行い、社会的な評価も得ている。このことから、芸術系大学出身の教員の視点、教育系大学出身の教員の視点の双方について参考となる意見を得るために協力を受けることとした。

- 12 文部科学省教員のメンタルヘルス対策検討会議2013教職員のメンタルヘルス対策について（最終まとめ）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655_03.pdf
- 13 ガーゲン, K.J. (東村知子, 訳) 2004 あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版.

(にかた・くにお 一般教育等／心理学)

(2014年10月31日 受理)